SUSAP2025Summer

中国・浙江科技大学プログラム

2025/8/15~2025/8/28

〇参加者プロフィール

飯島 しのん　　4 年　　経済学部　　経営学科

小野 綾香　　4 年　　経済学部　　経営学科

古賀 菜々子　　3 年　　理工学部　　知能情報システム工学コース

〇プログラム概要

留学先国：中国
留学先都市：浙江省
留学先大学名：浙江科技大学
留学期間区分：短期
研修言語：英語・中国語

〇スケジュール

8/15　浙江省到着，　ウェルカムディナー
8/16　オープニングセレモニー，　中国語授業，　太極拳体験
8/17　魯迅の里・黄酒博物館・東湖　訪問
8/18　中国語授業，　中国伝統衣装に関するビデオ鑑賞
8/19　中国語授業，　浙江省博物館見学
8/20　中国語授業，　京劇面作り
8/21　霊隠寺・飛来峰・西湖・清河坊　訪問
8/22　中国語授業，　康師傅（食品メーカー）訪問
8/23　修了式，　火鍋ディナー
8/24　shenhao（ロボット・AI メーカー）訪問・西塘見学（漢服体験）
8/25　蘇州到着，　拙政園・七里山塘見学

8/26　蘇州博物館見学
8/27　豫園・城隍廟　訪問，　上海夜景
8/28　東方明珠電視塔見学・帰国

〇宿舎
2 週間、蘇州・講習地・上海のホテルで生活しました。いずれも清潔で、水回りのトラブルもなく快適に過ごすことができた。ホテルの近くには地下鉄駅、ショッピングセンター、カフェがあり生活しやすかった。

〇食事
大学付近に滞在していた際は、大学のバイキング形式の学食を利用した。配られたカードをかざし、料理を乗せたトレイを台に置くと、台に埋め込まれたはかりによって料金が自動計算される仕組みで、中国の技術力を感じる食堂だった。レストランで食事することも、本場の中国料理を楽しむことができた。日本の中華料理とは味付けや雰囲気が異なり、現地ならではの味を毎日堪能できた。

〇参加者
参加者は、現地の学生・職員、ドイツ人学生約 20 名、そして佐賀大学生 3 名で構成されていた。初日はアウェイ感が強く緊張したが、ドイツ人学生も中国人学生も非常に親切で、積極的に会話に入れてくれた。その結果、ドイツや中国の文化に触れることができ、国際交流を深める貴重な機会となった。

〇杭州
中国浙江省杭州市は、上海市の南に位置する中国八大古都のひとつ。上海から高鉄（高速鉄道）で 50 分ほどの距離。自然と都会のバランスがちょうどよく、大きなショッピングモールも多くある。外国人の存在は珍しく、一緒に旅をしたドイツ人留学生が注目を集めていた。

〇授業
中国語の授業は最初は HSK 一級レベルで、日を追うごとにそのレベルが上がっていった。テストなどは特にないが、授業の中で問題に解答できるとお菓子を貰えることができ、楽しく学べる。中国語を使った様々なゲームも行った。ピンインの読み、日常会話レベルの単語の意味を理解できれば問題ない。

〇浙江科技大学
浙江省人民政府に属する工学を主体とする総合大学。科学技術分野のハイレベル応用型人材の育成を目的とし、機械・自動車設計製造及び自動化、電気工学、計算機科学、化学工学技術、工業設計等の分野に強みと特色がある。大きな湖があり、自然を感じられる。キャンパスが広大なため、バスに乗って移動した。

〇交通手段
プログラムに含まれる大学や観光地への移動には、基本的に専用の大型バスを利用した。一方で、個人的な移動などで利用した地下鉄は、運行間隔が約 3 分と短く、時刻を気にする必要がないため非常に利便性が高いと感じた。運賃も安価であり、30～40 分ほどの移動距離でも日本円で 100 円未満であった。

〇気候
滞在中の気温は 28℃～31℃程度と日本と同等だったが、湿度が高く、人も多かったので特有の蒸し暑さを感じる気候であった。なお、2 週間の滞在期間を通して降雨はほとんど見られず、天候は概ね安定していた。

「目で見て、感じて、学んだ二週間」

経済学部経営学科
4年 飯島しのん

私たちは二週間、中国の浙江科技大学で短期留学を行いました。この研修で、中国語の授業を初めて本格的に受け、イントネーションの違いや日本にはない発音に苦戦しながらも、中国語の魅力を感じ、もっと学びたいと思うようになりました。中国語の授業では、以前履修経験がある学生に合わせるのではなく、私たちにもわかるまで丁寧に教えてくれ、置いていかない教育が印象的でした。日本では座学が基本ですが、ここでは基本的に会話形式で中国語の使い方を学ぶことができ、ゲームなどを通して自然にコミュニケーションも取れるため、楽しく学ぶことができました。

また、漢服を着たり、京劇について学んだり、黄酒博物館、蘇州博物館、杭州博物館を訪れたりと、中国文化にも深く触れることができました。博物館では展示の細かい装飾や歴史の背景に感動し、京劇では面の色や模様それぞれに意味があることに奥深さを感じました。こうした体験を通して、教科書だけでは学べないリアルな文化の豊かさを実感しました。

日本では、中国だから危険かもしれないと、このプログラムの参加を控えた友達も何人かいました。しかし私は、大学のプログラムだからこそ安全に参加できる利点があると感じました。現地の学生や先生が常にサポートしてくれることで、危ない場面に遭遇する確率も低く、どのようなモラルや行動が適切かも学ぶことができます。こうして安全に配慮された環境でさまざまな経験を積めることは、貴重な学びにつながりました。

さらに、この研修にはドイツ人の学生二十名ほども参加しており、彼らとの交流も大きな刺激となりました。日常会話を通して、政治や環境問題、文化の違いについて意見交換を行いました。ドイツの学生は自分の夢を明確に持ち、世界の課題に対して積極的に考えて行動している姿に感銘を受けました。英語で議論する中で、自分の知識不足を痛感すると同時に、多様な価値観に触れる貴重な機会となりました。

私は大学4年間で5回、大学の海外プログラムに参加させていただきました。日本では体験できない多くのことを現地で学び、それぞれの国の良さ、そして日本の外に出たからこそ見えてきた日本の良さがありました。海外での出会いは一生の宝であり、外国にたくさん友人がいることは自分の自信にもつながっています。これまでの経験を通して最も学んだことは、「実際に行って自分の目で見ることの大切さ」です。アジアの発展途上国を中心に訪れましたが、どの国も自分が持っていたイメージとのギャップがあり、現地で感じたリアルな姿こそが本当の理解につながると実感しました。今後もこの経験を糧に、広い視野を持って学び続けていきたいです。

「本当の中国を見た二週間」

経済学部
4年 小野綾香

私は中国に二週間ほど滞在し、中国に対する印象が大きく変わった。事前研修で先生方からさまざまな注意を受け、SNS で中国に関する事件を目にするたびに、不安と警戒心が高まっていた。しかし、実際に訪れてみると危険な目に遭うことは一度もなく、帰国の際には「帰りたくない」と思うほど中国が大好きになった。

その理由を三つ紹介したい。まず第一に、中国での生活の利便性の高さである。中国では日本よりもはるかにデジタル化が進んでおり、買い物も交通機関の利用もすべてアプリ一つで完結する。日本では現金しか使えない場面も少なくないが、中国ではどんなに小さな店でもスマホ決済が可能で、非常に便利かつ効率的だ。

第二に、食事の魅力である。中国料理といえば「辛い」という印象が強いが、それだけではなかった。辛くない料理や日本人の口に合う味も多く、野菜中心の料理や豊富なフルーツなど、健康的な食文化にも驚かされた。また、中国特有の「好きなものを好きなだけ取って食べる」スタイルや、食事を贅沢に楽しむ文化にも惹かれた。

第三に、人との交流である。今回の研修では、中国人の学生二人と先生、二十名ほどのドイツ人学生、そして日本人三人で活動した。同じアジアの国同士、漢字を共有する国同士として、中国人学生とはすぐに打ち解けることができた。彼らは日本のアニメや音楽にも詳しく、会話が弾んだ。さらに、中国の教育制度や日本に対する印象など、現地でなければ聞けない話をたくさん教えてもらえたことも貴重な経験だった。

また、中国でドイツ人学生とも交流できたため、中国語と英語の両方を使いながら学ぶ良い機会にもなった。どの国の学生も英語が母語ではないため、お互いに安心して挑戦できる環境があったのも印象的だった。

今回の経験を通して、私たちが日本で抱く中国のイメージと、実際の中国の姿には大きな違いがあると実感した。自分の目で見て、耳で聞き、肌で感じることで初めてわかることがある。だからこそ、これからも自分の足で世界を見に行きたいと思う。

「固定概念を超えて得たもの」

理工学部知能情報システム工学コース
3年 古賀菜々子

この度、2週間の中国短期留学プログラムに参加した。今回が私にとって初めての海外であり、出発前は英語力への不安や、漠然と抱いていた海外への恐怖心から、期待よりも緊張の方が大きかったのが正直なところだ。しかし、この2週間の経験は私の価値観を大きく変え、世界の広さと多様性を肌で感じる貴重な機会となった。

今回の留学で最も大きな収穫の一つは、共に参加した20名ほどのドイツ人学生との交流だった。最初は英語での意思疎通に苦労し、もどかしさを感じていたが、皆とても優しく、拙い私の英語にも真剣に耳を傾け、意図を汲み取ろうとしてくれた。特に印象的だったのは、慣れない中国語の授業で私たちが戸惑っていると察して声をかけてくれたり、誰一人仲間外れにすることなく遊びに誘ってくれたりしたことだ。彼らの温かい人柄に触れ、完璧な言語能力がなくても、伝えようとする姿勢があれば心は通じ合えるのだと学んだ。これまで「自分には向いていない」と国際的なプログラムへの参加を諦めていたが、この経験を通してコミュニケーションの本当の楽しさを知り、大きな自信を得ることができた。また、彼らとの対話は、私自身の日本に対する知識の浅さを痛感する機会ともなった。彼らの豊富な知識と探求心に触発され、私も自国についてより深く学び、誇りを持って語れるようになりたいと強く感じている。

↑ドイツ人が誘ってくれたカラオケ

↑一緒にショッピングモールで買い物

一方、語学の面では、初心者にとって発音が難しい中国語の授業も、先生が丁寧に指導してくださったおかげで、楽しみながら基礎を学ぶことができた。英語に関しても、ドイツ人学生との日常会話を通して、実践的なコミュニケーション能力の重要性を再認識した。この経験を糧に、今後も中国語と英語の学習を継続していきたいと考えている。

↑みんなで参加したドイツの遊び

また情報系のコースに所属している私にとって、中国のデジタル化の進展は驚きの連続だった。特にキャッシュレス決済は社会の隅々まで浸透しており、滞在中の支払いは現金を一銭も使わず、全てスマートフォン一つで完結した。注文から決済までを客自身のスマートフォンで行う店舗や、駅に入るたびに行なう手荷

物検査など、デジタル技術を社会インフラに大胆に活用し、効率化を極めている様子は「デジタル大国」という言葉を実感させるものだった。

そして滞在中は、日本との文化的な違いに驚く場面も多くあった。円卓いっぱいに料理を振る舞う食文化や、店舗の従業員が客前で休憩したり、ドイツ人学生が授業中に自由に席を立ったりするなど、日本の常識とは異なる価値観に触れた。これらは、実際にその地を訪れなければ決して理解できなかった文化の違いであり、多様性を受け入れる上で貴重な経験となった。

↑円卓いっぱいの中華料理. この後さらに料理がくる

初めての海外経験は、私の中の固定観念を打ち破り、世界を見る視野を大きく広げてくれた。言葉の壁を越えて人と繋がることの喜び、日本を客観的に見つめ直す視点、そして新しいことに挑戦する勇気。この留学で得た全てを、今後の学生生活、さらには将来に活かしていきたいと思う。

↑伝統的な衣装である漢服を体験